

# 小学校英語におけるオーラシーとリテラシーの 統合的な教育を目指して

高 桑 光 徳

2011年度より小学校での英語教育が本格的に導入される。ただし、実際には多くの小学校ですでに何らかの英語教育が行われている。文部科学省が示している音声中心のオーラシー教育を実践するという方針に沿った現在の小学校英語は、特に低学年を中心に、歌ったり友達と話したりという活動を通して子どもたちが英語に対して関心を持つことに一定の成果をあげてきた。一方で、高学年になるにしたがって、そうしたオーラシー中心の活動では必ずしも知的好奇心が満たされない場合がある。子どもたちの発達とともに、音声だけでなく文字を中心としたリテラシー教育への関心が高まるようである。子どもたちの発達に適合するようにオーラシーからリテラシー教育への移行を円滑に行うにはどのようにすればよいのだろうか。本稿では、「ヘボンみらい塾」プロジェクトとして行っている英語教育の実践内容を取り上げながら、小学校英語においてオーラシーからリテラシー教育への円滑な移行が可能となるような統合的な教育モデルを提案したい。

## 1. 小学校英語の実施状況

2008年に新学習指導要領が告示され、2011年度より小学校5・6年で年間35時数（1時数の単位時間は45分）の英語教育が本格的に始まることになっている（文部科学省、2008）。正確には

英語教育ではなく、導入されるのは「外国語活動」である。しかし、「外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること」（文部科学省、2008, p. 95）という記述が指導要領にあり、今回の「外国語活動」の本格的な導入は、実質的には英語教育の導入と言い換えることができる。したがって本稿では、特に区別をする必要がない限り、「外国語活動」を英語教育と呼ぶことにする。

さて、2011年度から実施予定の英語教育であるが、実際にはすでに多くの小学校において何らかの形で実施されている。文部科学省（2009b, 2009c）の調査では、調査対象となった全国21,442校の小学校のうち、2009年度には97.8%にあたる20,978校が外国語活動を行う計画であった。さらにこの割合は、2010年度には約99%に達する。また、年間授業時数については、2009年度が平均約28時数、2010年度予定では平均約32時数となっており、2011年度から実施される年間35時数に近い形で小学校英語が実施されていることが分かる。このように、指導要領上では2011年度から本格的に導入されることになっている小学校での英語教育ではあるが、実施規模や授業時間数から鑑みて、実質的にはすでに前倒しで実施されていると言える。

新学習指導要領のもとで行われる小学校での英語教育では、英語のいわゆる4技能のうち、聞く・話すというオーラシー能力の育成が焦点となって

いる。新学習指導要領では、

外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること

(文部科学省, 2008, pp. 95-96)

が英語を指導する際に配慮することがらとしてあげられている。これは、それ以前のリテラシー偏重の英語教育に対する反省から、2002年度より施行されている中学校の現行学習指導要領において外国語についてはオーラシー能力を中心とした実践的コミュニケーション能力を育成することが強調されることとなった(文部科学省, 1998)が、その流れを受け継いだものと考えられることができる。

コミュニケーション中心の英語教育というと、その内容を精査することなくすぐに反対の声をあげる人たちもいるが(e.g., 茂木, 2004; 大津・鳥飼, 2002; 齋藤・斎藤, 2004; 齋藤, 2003)、言語を習得するのであれば(その言語を何か特定の目的のみに使用する場合を除いて)オーラシーとリテラシーのバランスのとれた教育が必要となるのは至極当然のことと言える。現行指導要領が施行されるまでの長い間、リテラシー偏重の英語教育が続いたため、その時代に教育を受けた人たちにとっては現在のコミュニケーション中心の英語教育がオーラシーに重点を置き過ぎているかのように感じられるのかもしれないが、実際にはそのようなことはないのである。オーラシー能力の育成に焦点をあてた現行指導要領が導入された後も、生徒たちのオーラシー能力が劇的に向上したという話は聞かない。これはひとつには、指導要領が変わっても、リテラシー偏重の英語教育を中

学校・高等学校で受け、なおかつリテラシー中心となる教育を大学の英文学科(あるいはそれに近い名称の学科)で受けた人たちが教員免許を取得して現在教壇に立っている場合が多く、実際の教育現場でコミュニケーション中心の英語教育を行うことが難しいことによる(高桑, 2010)。したがって、現在よりもさらにオーラシー中心の教育を目指して初めて、オーラシーとリテラシーのバランスのとれた英語教育が実践できると言えるだろう。

## 2. 子どもの発達と英語教育の内容について

さて、小学校英語におけるオーラシーとリテラシーのバランスを考える際に、ひとつ注意しなければならないことがある。それは子どもの年齢である。一口に小学生といっても1年生から6年生まで最大で5学年の開きがあり、発達上の差は大きい。もちろん発達には個人差があり、学年が変わったらこうなるというようなことは、一概に言えない。ただし、全体的な傾向を把握しておくことは大切であろう。文部科学省は2009年度に、小学校英語に関する教育課程等の改善に資する実証的資料を得るため、2009年度「英語教育改善のための調査研究事業」の調査研究校にあたる小学校123校の児童31,914人及び教員123人に対し、アンケート調査を行った(文部科学省, 2009a, 2010b)。この調査は、英語教育の内容と学年ごとの子どもの発達の違いという観点から、非常に興味深い結果となっている。例えば、「英語の授業は好きですか?」という質問に対して、総数31,914人のうち、「好き」または「どちらかといえば好き」と答えた生徒の合計は75.6%であった(表2.1)。

表 2.1. 「Q1. 英語の授業は好きですか？」に対する回答

	件数	構成比 (%)
調査数	31,914	100.0
好き	15,240	47.8
どちらかといえば好き	8,876	27.8
どちらともいえない	5,368	16.8
どちらかといえば嫌い	1,431	4.5
嫌い	982	3.1
無回答	17	0.1

(出典：文部科学省, 2010a)

調査対象全体で考えれば、約 4 分の 3 の児童が英語の授業を肯定的に捉えていることになる。ところが回答を学年別に見てみると、表 2.2 のようになる。

表 2.2. 「Q1. 英語の授業は好きですか？」に対する回答 (学年別)

	調査数	好き (%)	どちらかといえば好き (%)	合計 (%)	
学 年	全体	31,914	47.8	27.8	75.6
	1年	1,953	76.3	12.5	88.8
	2年	2,078	66.4	20.9	87.3
	3年	6,634	63.2	21.1	84.3
	4年	7,047	48.2	28.6	76.8
	5年	7,072	38.8	32.7	71.5
	6年	7,130	28.5	34.7	63.2

(出典：文部科学省, 2010a)

英語の授業を肯定的に捉える割合は、1 年生の約 89% をピークに、学年が上がるにつれて低い割合を示し、6 年生では約 63% にとどまっている。つまり、全体で見れば約 4 分の 3 の児童が英語の授業を肯定的に捉えているが、学年が上がるにつれてその割合は減少し、6 年生では 6 割程度にまで落ち込んでしまうのである。

では次に、英語の授業全体ではなく、個別の活

動についての質問をさらに詳しく見てみよう。授業で歌を歌うことは、小学校英語において主要な活動のひとつであるが、児童はどのように感じているのであろうか。

表 2.3. 「Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「ア. 英語の歌を歌うこと」についての回答

	件数	構成比 (%)
調査数	31,914	100.0
あてはまる	12,512	39.2
どちらかといえばあてはまる	11,142	34.9
どちらかといえばあてはまらない	4,507	14.1
あてはまらない	1,934	6.1
わからない	1,123	3.5
授業でやっていないと思う	524	1.6
無回答	172	0.5

(出典：文部科学省, 2010a)

ここでも児童全体で見れば、約 74% が英語の歌を授業で歌うことを楽しいと捉えている (表 2.3)。ところが回答を学年別に見ると、以下の表 2.4 のようになる。

表 2.4. 「Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「ア. 英語の歌を歌うこと」についての回答 (学年別)

	調査数	あてはまる (%)	どちらかといえばあてはまる (%)	合計 (%)	
学 年	全体	31,914	39.2	34.9	74.1
	1年	1,953	76.2	15.7	91.9
	2年	2,078	63.9	25.5	89.4
	3年	6,634	57.2	30.1	87.3
	4年	7,047	39.9	37.9	77.8
	5年	7,072	27.7	39.9	67.6
	6年	7,130	15.8	39.5	55.3

(出典：文部科学省, 2010a)

ここでも最初に見た「英語の授業は好きですか？」に対する回答と同じように、高学年になるにした

がって肯定的に捉える割合が低くなっているのが分かる。6年生にいたっては、授業中に歌うことを楽しいと考える割合が半分くらいしかないということになる。文部科学省（2010a）が公表している結果によれば、この「英語の授業で楽しいと思うこと」という問いについての他の項目である「イ. 英語のゲームをすること」、「エ. 英語で友達と会話をする事」、「カ. 外国のことについて学ぶこと」、「キ. 日本語と英語の違いを知ること」においても同様の傾向が見られる。すなわち、高学年になるにつれて、こうした授業内容を楽し

いと思う割合が減少しているのである。

これに対し、「サ. 英語の文字や単語を読むこと」と「シ. 英語の文字や単語を書くこと」というリテラシーについての質問については、高学年になるにつれて肯定的に捉える割合が高くなっている（表 2.5-2.8）。この結果から分かることは、小学生と一口に言っても、発達の度合いによって英語の授業の中で楽しいと思う活動に差があるので、子どもたちの成長に合った教育を行う必要があるということである。低学年のうちは歌を歌ったり友達と英語で会話したりといったオーラシー

表 2.5. 「Q 4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「サ. 英語の文字や単語を読むこと」についての回答

	件数	構成比 (%)
調査数	31,914	100.0
あてはまる	8,394	26.3
どちらかといえばあてはまる	7,372	23.1
どちらかといえばあてはまらない	4,424	13.9
あてはまらない	2,467	7.7
わからない	1,891	5.9
授業でやっていないと思う	6,934	21.7
無回答	432	1.4

(出典：文部科学省, 2010a)

表 2.7. 「Q 4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「シ. 英語の文字や単語を書くこと」についての回答

	件数	構成比 (%)
調査数	31,914	100.0
あてはまる	8,308	26.0
どちらかといえばあてはまる	5,770	18.1
どちらかといえばあてはまらない	3,397	10.6
あてはまらない	2,127	6.7
わからない	1,522	4.8
授業でやっていないと思う	10,356	32.4
無回答	434	1.4

(出典：文部科学省, 2010a)

表 2.6. 「Q 4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「サ. 英語の文字や単語を読むこと」についての回答 (学年別)

	調査数	あてはまる (%)	どちらかといえばあてはまる (%)	合計 (%)	
学 年	全体	31,914	26.3	23.1	49.4
	1年	1,953	29.7	7.4	37.1
	2年	2,078	25.2	14.1	39.3
	3年	6,634	26.8	19.6	46.4
	4年	7,047	24.9	23.9	48.8
	5年	7,072	26.6	26.9	53.5
	6年	7,130	26.4	28.7	55.1

(出典：文部科学省, 2010a)

表 2.8. 「Q 4. 英語の授業で楽しいと思うこと」の中で「シ. 英語の文字や単語を書くこと」についての回答 (学年別)

	調査数	あてはまる (%)	どちらかといえばあてはまる (%)	合計 (%)	
学 年	全体	31,914	26.0	18.1	44.1
	1年	1,953	16.3	3.8	20.1
	2年	2,078	24.2	8.3	32.5
	3年	6,634	27.6	13.4	41.0
	4年	7,047	25.6	17.8	43.4
	5年	7,072	26.8	21.6	48.4
	6年	7,130	27.5	25.9	53.4

(出典：文部科学省, 2010a)

中心の授業で楽しめるが、高学年になるにつれて、おそらくそれだけでは満足しなくなるのであろう。学年が上がると英語の文字や単語を読んだり書いたりといったリテラシーの要素に関心を持つ割合が増えてくる。したがって、小学校英語では、子どもたちの発達段階に応じて、オーラシーとリテラシーの能力育成をはかる必要が出てくるのである。

### 3. フリガナとしての発音記号を媒体としたオーラシーとリテラシー教育の統合

さて、これまでの議論を踏まえ、オーラシーとリテラシーのバランスを保ちながら小学校英語を実践するには、どのようにすれば良いのだろうか。上述のように、小学校での英語教育はすでに実質的には導入されており、多くの研究者や現場の教員によって実践的に使える教材や方法論が紹介されている (e.g., アレン玉井, 2010; 樋田, 2008; 吉田, 2008)。しかしその多くは、オーラシー中心のタスクを集めながらも音声素材が含まれていなかったり、音声素材がある場合にも、付属のCD等に収録されているに過ぎない。音声素材を添付するだけでオーラシー能力が育成されるのであれば、これまでの英語教育でもそうなる可能性はあっただろう。なぜなら、CDはもちろんのこと、CDが普及する以前から、テープとして音声素材は入手可能であったからである。英語の音声を正しく出すことは難しく、アルファベットを自分では言えていると思っている人でも意外に言えていない状況は以前から続いている (中津, 1978)。

おそらく音声に対する感覚が敏感な一部の人を除いては、外国語の音声を聞いただけで、その言語における意味のある対立を識別できる弁別能力

を習得することは大変難しい。日本人学習者が英語を学ぶ時に right と light の違いを聞き取ったり自分で言ったりするのが難しい場合や、逆に外国人学習者が日本語を学ぶ時に「おじさん」と「おじいさん」の区別をしにくい場合がこれにあたる。いったん母語の音韻体系を習得してしまうと、人間はそれ以降、通常は自分の母語の音韻体系で外国語の音声を処理しようとしてしまうからである。聞き分けるといふ知覚だけでなく、実際に音声を発する産出までを含めた母語の音韻体系の習得自体は成人期まで続くものの、一般的には1歳前後ですでに母語に必要なではない音声に対する弁別能力がなくなり、4歳頃までに母語における音声対立を弁別する能力を徐々に身につけて、4、5歳では成人の音知覚能力と同じになるという (大塚, 2005; 湯澤・関口・李, 2007)。つまり、日本語を母語とする子どもであれば、少なくとも音声の知覚に関して言えば、小学校入学の段階ですでに日本語の音韻体系を身につけている。したがって、その後でいくら英語の音声を聞いたとしても、ただ聞くだけではなかなか英語の音韻体系を習得することは難しい。結果的に、これまでの英語教育を受けてきた学習者がそうしてきたように、小学生がせっかく早い時期から英語を聞いても、英語の音をカタカナで代用してしまう危険性がある。こうした小学生がそのままカタカナ発音のまま英語学習を進めてしまうようであれば、オーラシー中心の英語教育を小学校にまでおろした意味がなくなってしまうのである。

ではどうすれば小学校英語において、児童がカタカナ発音で英語を覚えることがないようにオーラシー中心の英語教育を行いつつ、将来的なリテラシー能力の育成につながる教育を行うことができるのであろうか。ひとつの解決策は、高桑 (2010) が提示したように、英語学習の初期の段階からフ



リガナとしての発音記号を導入することである。もちろんこれは発音記号そのものを教えることに主眼がある訳ではなく、発音記号をいわば英語の音韻体系を教えるツールとして扱うのである。例えば hat と hut の音の違いは、カタカナ表記に頼る限りにおいて、その差異を示すことはできない。その時に、ただ「音が違う」というだけでは学習者に対してじゅうぶんな手助けをしているとは言えない。やはり「どう違うのか」、そして「その違いはどのように出すのか」というところまで教える必要があるであろう。フリガナとして発音記号を使うことで、その差を示すことが可能になる。hat と hut であれば、[h] と [t] という子音は両者に共通しているので、このふたつを異なった単語としているのは、音声的な差ではあくまでも母音の違い [æ]/[ʌ] だけなのである。こうして [æ] や [ʌ] という発音記号をフリガナとして提示することによって、学習者はカタカナを介在させることなく英語の音声を手につけることが容易になる。また、この方法を使うことで、文字としてのアルファベットを導入する際に、カタカナの「エー」「ビー」「シー」等ではなく、英語の音声としての [éi] [bí:] [sí:] 等として教えることが可能になるのである。以下、オーラシー能力の育成に主眼を置きつつも、フリガナとしての発音記号を導入することで、同時に後のリテラシー能力の育成につながるような英語教育のひとつのモデルを提示したい。

なお、音韻体系の習得に関しては、本来は音を表す括弧 ([ ]) ではなく、音素を表すスラッシュ (/ /) を用いるべきであろう。ただし、ヘボンみらい塾では小学生向けの英和辞典を使用しており、これに合わせるかたちで本稿では、英和辞典の中で音を表す際に一般的な表記である括弧を用いている。

#### 4. ヘボンみらい塾の創設

本稿で紹介するのは、明治学院大学教養教育センターが大学の支援を受けて実施しているヘボンみらい塾での試みである。明治学院大学では、校内の特色ある教育プロジェクトをさらに充実したものに発展させることを目的として、活動経費の助成を行う「教育プロジェクト支援制度」を展開している。ヘボンみらい塾は、2009年度の同制度による助成プロジェクトのひとつとして採択された。ヘボンみらい塾が目指したのは、1985年の校舎開校以来、20年以上に亘って明治学院横浜校舎を支えてくださった地元戸塚区、そして広く横浜市に在住・在勤されている方々への恩返しをすることで、本学が地域により深く密着し、地元の方々との共生を図ることであった。これは明治学院大学の教育理念である「他者への貢献」を実践する新しい試みと言える。大学がその有する物的・人的資源を地域に還流させることにより、そして学生・教員と地元の方々との交流を促すことにより、「学びあい」というかたちでの新たな共生の可能性を探るひとつのモデルを目指した。

ヘボンみらい塾の開設から現在にいたるまでの詳細については別の機会に譲るとして、本稿ではオーラシーからリテラシーへの移行を視野に入れたカリキュラムモデルとしてのヘボンみらい塾の試みについて述べることにする。

小学校での英語教育導入に関連し、英語教員免許を所有していない小学校教員からは不安の声が多くあがっていた。その中でも音声に関する知識や技能について自信が持てないために英語の授業を担当することを不安視する声が大きかった(樋田, 2008)。そこでヘボンみらい塾では、子どもたちに英語を教えることのできる教員数の不足を

解消するひとつの手段として、教職に強い関心を抱いている大学生に必要なトレーニングを施し、学習支援者として配置することを目標とした。具体的には、地元の小学生が通いやすい場所に教室を開き、そこで大学生が小学生に英語を教えるというものである。大学生の役割は、授業中に先生役として前に立つ学生がひとり、それ以外に数名の学生がアシスタント役として子どもたちのそばに座り、状況に応じたサポートを行うこととした。学生たちは「英語コミュニケーション」、「英語研究」、「英語科教育研究」といった大学での授業を履修し、実践的なコミュニケーションや英語教育に関する理論を大学の正規の授業として学んでいる。学生たちは大学で学んだ理論を実践というかたちで深化させる機会として参加しており、ボランティアで教育にあたった。こうした学生の協力により、ヘボンみらい塾では授業料を徴収することなく、小学生に英語を学ぶ機会を提供することができた。

ただし、上述のように、ヘボンみらい塾では大学生が授業の一環あるいは実習に近い形で小学生に英語を教えるという形態をとっていたため、実施する上で大きな制約があった。それは、大学の授業期間中にしか開講できないということである。したがって、夏季・春季に比較的長い休暇を挟むという点で、小学校での英語教育のように年間計画を立てることはもともと難しかった。さらに、2009年度はヘボンみらい塾立ち上げの年度であったため、授業を行う場所の確保等の手続きで当初の想定をはるかに上回る時間を要した。ようやく開講できる目処が立ったのは2009年秋になってからであった。このため、取り扱う授業内容、大学の残りの授業期間、そしてもちろん子どもたちの学びやすさや通いやすさを勘案し、ヘボンみらい塾の授業は1回1時間のクラスを週1回で全8

回と決定した。また、対象となる小学生の学年は、オーラシーからリテラシーへの移行を考慮して、英語初習者でなおかつ比較的高い学年を想定した。ただし6年生は中学受験のシーズンと重なることを考慮して、2009年度ヘボンみらい塾では小学校4年生と5年生を対象とした。図4.1は生徒募集用に作成したチラシである。なお、上述のようにヘボンみらい塾は、大学生が中心となって小学生に英語を教えるプロジェクトである。このため、授業時における先生役やアシスタント役の学生は、授業以外でも教材作成や教室の飾り付けなどにも主体的に取り組んでいた。図4.1のチラシの中にある絵も大学生との協働による作品である。

2009年度ヘボンみらい塾では月曜日から金曜日までの5クラスを開設し、各曜日12人～13人でのべ63人（男子32人、女子31人）の小学生が参加した。先生役は月曜日から木曜日までを担当した男子大学生ひとりと金曜日を担当した女子学生ひとりで、この他にアシスタント役として多くの大学生がヘボンみらい塾の運営に携わってくれた。

## 5. オーラシーからリテラシーへの円滑な移行


では次に、ヘボンみらい塾でのカリキュラムを見てみよう。すでに述べたように、オーラシーからリテラシーへの円滑な移行を目指し、英語のフリガナとしての発音記号を導入することとしていた。小学生に対しては発音記号という名称は使わず、「英語の読みがな」という表現を用いた。なお、開講当時はひとつのコースのみであったため「ヘボンみらい塾」という名称を使っていたが、2010年度になってヘボンみらい塾の修了生を念頭においた発展的なコースを新設した。後者に

明治学院大学

# へボンみらい塾

☆ 生徒募集 ☆

正しい英語を音から身につけよう!



りんごは「アップル」?  
ABC は「エービーシー」?  
EAR(耳)とYEAR(年)はどっちが「イヤ」?

きちんと伝わる英語を目指してカタカナ英語にさようなら!  
大学生のお兄さん先生、お姉さん先生に、英語の正しい音を教えてもらおう!!

MG MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

\*学習目標: 発音記号を見て英語の音を正しく出せるようになる  
\*対象年齢: 英語を学び始めて1年未満の小学4年生・5年生  
\*講師: 英語の発音トレーニングを受けた本学学生  
\*授業料: 無料  
\*授業予定(週に1日、16:30-17:30の各1時間、全8回、各曜日とも定員12人)

クラス	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
月	11/9	11/16	11/30	12/7	12/14	12/21	1/4	1/18
火	11/10	11/17	11/24	12/1	12/8	12/15	1/5	1/12
水	11/11	11/18	11/25	12/2	12/9	12/16	1/6	1/13
木	11/12	11/19	11/26	12/3	12/10	12/17	1/7	1/14
金	11/13	11/20	11/27	12/4	12/11	12/18	1/8	1/15

\*応募方法: 往復はがきに①お子様の名前(フリガナ)、②希望曜日、③学年、④英語学習歴、⑤保護者の方の名前(フリガナ)、⑦住所、⑧電話番号を明記の上、〒244-8539 横浜 市戸塚区上倉田町 1518 明治学院大学教養教育センターへボンみらい塾へ宛先でご応募ください。(10月29日必着、応募者多数の場合は抽選後、11月2日までに返信)  
なお、定員に余裕のある場合は、10月30日以後も随時受け付けます。明治学院大学教養教育センター(045-863-2067、平日 10:00-16:00)までお電話でお申し込みください。

※「へボンみらい塾」は「へボン式ローマ字表記法」の考案者として広く知られる明治学院大学の創設者へボン博士は、1863年に本学の歴史の源となるへボン館を横浜に開設し、医療と教育活動を通して地域に貢献しました。明治学院大学教養教育センターではへボン博士の理念を継承し、戸塚の地へ「へボンみらい塾」を開設します。地域の方々とともに生きることを目指し、大学がその有する精神的・人的資源を地域に還元させることで、そして学生・教員と地元の方々との交流を促すことにより、「学びあひ」というたちで新たな共生の可能性を探ります。「へボンみらい塾」プロジェクトは児童教育・リカレント教育・生涯学習・ボランティア実践の4分野にまたがり、まずは児童教育部門から出発し、順次その他の分野での企画を実施する予定です。


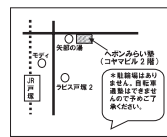



図 4.1. 2009 年度へボンみらい塾チラシ

「へボンみらい塾（上級編）」という名称を用いることになったため、区別するために2009年に開講したコースは遡及的に「へボンみらい塾（初級編）」と呼ぶことになった。以下、カリキュラムに関わる部分では「へボンみらい塾（初級編）」という名称を使うことにする。

8週間にわたるへボンみらい塾（初級編）のカリキュラムのうち、主要な流れは以下の通りである（表5.1）。基本的な流れは、アルファベットを導入しながら同時に正しい英語の音を教えて、その後「ABCの歌」と「きらきら星」を歌い、さらにここまででカバーしきれない音については、日本語にすでにカタカナとして入ってきている単語を使って学習するというものである。同時に、英和辞典を自ら引くことによって、今まで習った発音記号が実際に辞書に掲載されており、これを

確認することで初見の単語でも発音記号の知識と辞書があれば正しく読めることを体験的に学ぶということを目指している。最終的には絵本を読むことでこの自律学習を経験し、今後も英語の学習を続けたいという意欲さえあれば、辞書を片手にある程度は自分で英語の勉強ができることを示している。このように、発音記号を用いることで、8週間のプログラムを通じてオーラシーからリテラシーへの円滑な移行を実践することができるのである。

## 6. 小学校英語におけるオーラシーとリテラシーの統合的な教育の可能性

上述のように、へボンみらい塾（初級編）では「英語の読みがな」として発音記号を導入し、オー



表 5.1. ヘボンみらい塾（初級編）の主な授業内容

週	主 内 容
1	[i:] の仲間のアルファベット (B, C, D, E, G, P, T, V, Z) と、それに関連する発音記号 ([b] [s] [d] [tʃ] [dʒ] [p] [t] [f] [v] [z]) の読み方
2	[ei] [ai] [ju:] の仲間のアルファベット (A, H, J, K, I, Y, Q, U, W) と、それに関連する発音記号 ([k] [w] [ʌ] [l]) の読み方の読み方
3	[e] [ou] [ɑ:r] の仲間のアルファベット (F, L, M, N, S, X, O, R) と、それに関連する発音記号 ([m] [n] [r] [h]) の読み方
4	「ABC の歌」の練習と、その中に出てくる新しい発音記号 ([æ] [au] [i] [ŋ] [ð]) の読み方
5	「きらきら星」の練習と、その中に出てくる新しい発音記号 ([ə:r] [ər] [ə]), さらにそれ以外の発音記号 ([u:] [ɑ] [j] [ʃ] [θ] [auər] [aiər]) の読み方
6	最後に残った発音記号 ([ɛər] [iər] [uər] [u] [ɔ:] [ɔ:r] [ɔi] [ɑ:] [ʒ] [g]) の読み方 英和辞典の導入 (数字の読み方)
7	絵本の導入 (辞書を使って <i>Where the wild things are</i> の一部を読む)
8	今までのレッスンの復習ゲーム (これまでに扱った単語を使い、発音記号がどの程度読めるようになったかを楽しみながら確認) ヘボンみらい塾に対するアンケート 修了証の授与

ラシー能力とリテラシー能力のバランスのとれた育成を目指した。ヘボンみらい塾プロジェクトは、明治学院大学の学内「教育プロジェクト」の支援を受けた実践的な取り組みとして始まったため、ヘボンみらい塾に通う前の子どもたちの英語の能力を示すデータはない。また、ヘボンみらい塾修了後の子どもたちの英語の能力を測定することも、研究プロジェクト等として開講した訳ではないので、時間的にも予算の上でも不可能であった。そこで、8週間の授業終了後に子どもたちにアンケートを実施して、彼ら彼女たちの感想を聞くことにした。もちろん小学生が記入するアンケートであり、綴られている感想がどの程度彼ら彼女たちの本心を正確に反映しているかは分からない。したがって、このアンケート結果をデータとして解釈する際は、注意が必要である。しかし、ヘボンみらい塾における英語教育の成果を測る上でのひとつの参考資料となることは確かである。

さて、子どもたちへのアンケートであるが、以

下の方法を用いた。子どもたちがなるべくリラックスした状態で感想を書けるように、最終週の復習ゲームが終了した後で、アンケート記入の時間を設定した。アンケート用紙を配布し、先生役の学生がヘボンみらい塾の授業内容をより良いものにするための大切なアンケートである事を伝え、できるだけ正直に書いてもらえるように話をした。匿名であることも強調し、素直な意見が書けるような環境作りに配慮した。また、子どもたちが当日やったゲームの感想に終始しないように、ヘボンみらい塾の授業内容を簡潔に説明して子どもたちが以前のことも思い出せるように心がけた。

アンケートの内容はヘボンみらい塾で「楽しかったことは?」「できるようになったことは?」「むずかしかったことは?」の3つの質問と、「先生にメッセージ」のコメント欄とし、子どもたちが感想を書きやすいようなデザインのアンケート用紙を作成した(図 6.1)。なお、図の右端下部には、もともと先生役の学生の愛称が記されていた

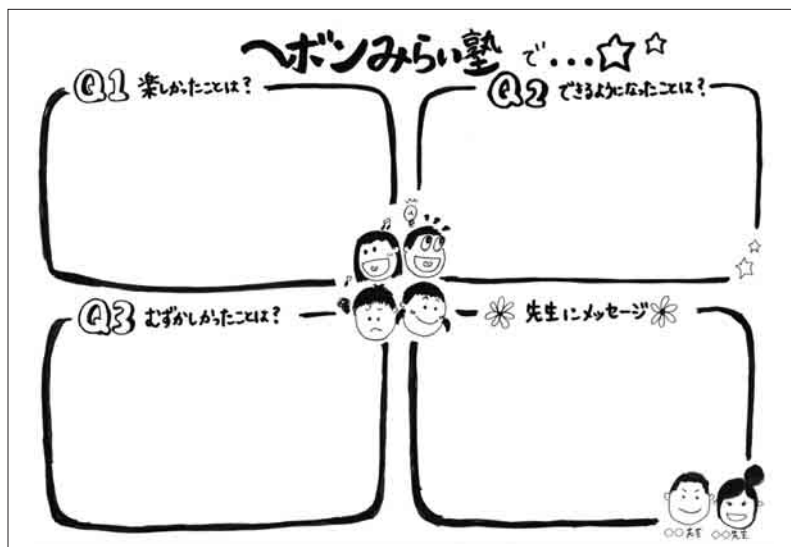


図 6.1. 2009 年度へボンみらい塾（初級編）受講者用アンケート

が、ここでは個人情報保護の観点から匿名としてある。最終日に欠席した児童ひとりを除き、全受講生 63 人中 62 人の児童から回答を得ることができた。表 6.1 は「先生にメッセージ」の欄を除いた 3 つの質問に対する受講生の回答を、一部個人が特定できる部分を除き、そのまま転記したものである。誤字脱字についても、子どもたちの感想をありのまま伝えるために原文のままとなっている。

アンケート結果を検証すると、子どもたちが単に英語の発音に対する意識が高まっている (No. 2、3、5、7、10、14、19、22、25、28、29、39、51、52) だけでなく、辞書を引くことや本を読むことに興味を示し (No. 1、2、3、4、6、21、24、26、28、29、35、40、42、46、48、49、50、52、53、54、55、56、57、62)、オーラシーからリテラシーへの移行が可能となっていることが分かる。したがって、「英語の読みがな」として発音記号を導入し、オーラシーからリテラシー教育への円滑な移行を目指すというへボンみらい塾の目標は達成されているといえるであろう。

では、この結果を小学校での英語教育に活かすには、どのようにすれば良いのであろうか。上述したように、オーラシーとリテラシーのバランスのとれた統合的な教育のひとつの方法として、発音記号を導入することで英語の音韻体系を明示的に説明することができる。アレン玉井 (2010) が指摘するように、外国語の学習においては音声は重要な役割を果たしている。

これは子どもの反応を見ていると痛感するのだが、外国語を学ぶ時、彼らは新しい世界への憧れを持つ。外国語学習を続けるにはその憧れや興味を持ち続けてもらうことが必要であり、そのために「音」は大変大きな意味を持つ。

(アレン玉井, 2010, p. 89)

同時に、音声知識の習得はそれほど容易ではなく、そのため「個々の音素に関しては、意識的に練習しなければその習得は難しい」(アレン玉井, 2010, p. 93) のである。英語の読みがなとして発音記号を導入し、意識的に英語の音韻体系を学習する

小学校英語におけるオーラシーとリテラシーの統合的な教育を目指して

表 6.1. 2009 年度ヘボンみらい塾（初級編）アンケート結果

No.	Q1. 楽しかったことは？	Q2. できるようになったことは？	Q3. むずかしかったことは？
1	えいごのじしょでしらべたこと	じしょをつかえるようになった。しゃべれるようになった。	しゃべりかた、じしょでみつけたことをかくときのぼしよ。
2	先生方が、とてもやさしく分かりやすく教えてくださったので、授業がとても楽しかったです。いっしょにすわっている子と、考えあったりできてうれしかったです。いままで使ったことのなかった辞典なども使わせてくれたのでとても楽しかったです。	たとえばふだんかたかなで使っている。「シチュー」などを、「ステュー」に変えるのはびっくりしました。分かっているようで分かっていない英単語を教えてくださいよかったですと思います。アルファベットも全部言えるようになりました！	むずかしかったことは特にありません。先生方が分かりやすく教えてくださったので「むずかしいな」と思わない事が多かったです。
3	キラキラぼしをみんなでやったこと、辞書でさがすのが楽しかった	はつ音練習 (ei とか)	英語
4	・辞書を引いたりすることが楽しかった。 ・読み方？とか。	・英語 (たぶん) ・英語の辞書を引くこと	英語の発言がむずかしかった。
5	みんなと英語の授業が出来ること。A 先生の話す時。	英語の本当の発音。学校ではカタカナの発音をおしえてもらっているからうれしい！	英語の発音。英語の歌。
6	みんなで発音の練習をした事と今日やったゲームが楽しかったです。	アルファベットの発音記号が書けるようになったり単語も少し覚えられました。英語辞典でひけるようになった事。	英語の歌と絵本がむずかしかったです。
7	A 先生が目をつぶってなんかいたりしているところがおもしろかったです。授業は、なんかぼしのうたがおもしろかったです。	キラキラぼしの歌えるようになりました。ABC の歌もうたえるようになりました。	ペロとかまいたりしたりするのがむずかしかったです。
8	話しあったこと	読みや単語	とくに、rait と lait がわかんない
9	全部	発音がうまくなった	ない
10	英語で「ABC の歌・きらきら星の歌」を歌った事	英語の発音	舌を前歯に付けたりする、発音
11	先生たちが、おもしろくて、やさしく教えてくれた事。	えいごで、「キラキラ星」の歌がうたえるようになった。	発音
12	ゲームなどをしながら、英語を学んで楽しかった。	英語で字を書くには、アルファベット以外もいるんだなーと思った。	知らなかった英語を学ぶ時はむずかしかった。
13	最後のゲームがめっちゃ楽しかったしおもしろかった。	とくにない (発音が上手なった?)	発音が……
14	ABC ソング	発音記号をよめるようになったこと	かいじゅうたちのいるところ
15	最後のゲームがたのしかった。	はつおんや読みかたが分かった。	読み方
16	英語を勉強が楽しかった。	英語の歌が歌えるようになった。	物 (物の英語が) とか……英語がムズかった。
17	なにも		
18	はつおんがいっぱいできた。	英語いっぱいできるようになった。	×
19	さいごの英語のクイズがたのしかったよ	英語のクイズができるよーになったよ	英語のシチューがむずかしかったよ。
20	一番楽しかった事は今日やったクイズです。ぼくがせいはいしたのはヘッド (頭) です。それがたのしかったです。	歌のさいしょらへんです。	むずかしかった事は、はつ音です。
21	英語の発音がキレイになって、英語が好きになった。	英語の発音。	ふくしゅう (さいごにやったやつの時) かいじゅうたちのいるところなど……
22	さいごの英語のクイズがたのしかったよん	英語ができるよーになったよ	英語のシチューがむずかしかった。
23	いちばんさいごのみんなでやったゲームがたのしかったです。	すこしはつおんができるようになった。あと、すこしえいごができるようになった。	はつおんがとてもむずかしかったです。
24	本のやつ	えいごの字、はつおん	本のやつ
25	ゲームしたことです！	ABC ソングやきらきらぼしがうたえるようになったこと!!	右 (ライト) とライトのちがいです！
26	最後の英語のゲーム	英語の発音ができるようになった。	辞書で調べるのがむずかしかった。
27	全部楽しかったぜ!!	英語がま々×2 しゃべれるようになった。	べつに。うちてんさいだからない
28	ゲームをしたこと	・ABC ソングを歌えるようになったこと ・英語の辞書をひくこと	右と光のちがいは

小学校英語におけるオーラシーとリテラシーの統合的な教育を目指して

No.	Q1. 楽しかったことは？	Q2. できるようになったことは？	Q3. むずかしかったことは？
29	ゲーム	英語の辞書の調べ方	右（ライト）と光（ライト）のちがいが
30	いろいろなえいごのはつおんをしたこと。	えいごを少し読めるようになった。	はつおんがむずかしかった。
31	最後にゲームができたこと。	はつ音をおぼえたこと	はつ音がちょっとむずかしかった
32	クイズゲームが楽しかった！ 歌が楽しかった！	単語がたくさんわかるようになった。歌がわかるようになった！ ABCの歌が完ペキになった！	新しい単語を覚える時がむずかしかった！
33	全部先生といっしょにじゅぎょうできたこと	英語	英語
34	わかりやすかった	はつおん	はつおん
35	英語の発音	うまく発音すること	かいじゅうたちのいるところのよみがな
36	全部	英語がしゃべれるようになった	言い方・発音
37	ABCの歌	はつ音	最後のゲーム
38	いろいろな英語のはつ音やたん語が楽しく出きた。	ABCの歌を歌えるようになったことと、たん語や正しいはつ音が分かった。	はつ音が同じたん語がちがえてしまった。
39	・ゲームを、した。 ・発音をおぼえるのが楽しかった。	・物の名前の発音や、ABCの歌がうたえた！ ・発音が、より英語らしくなった！	・同じ読み方でも、ちがういみの言葉の発音。
40	英語を楽しく覚えられたこと、友だちができたこと	英語の辞典がひけるようになった、発音がうまくなった！	発音を覚えること
41	先生	ABCの歌をうたえるようになった。	発音
42	ゲームや辞書ひき。	英語のはつ音。	歌（きらきら）（星）
43	ゲーム	英語	英語、うた
44	最終日のゲーム	英語の発音	英語の ABCDEFGHIJKLMNOPQRST UVWXYZ
45	発音するところ。	英語の発音がよくなった。	・英語の書き方 ・小文字
46	みんなで発音すること	うまく発音できるようになった	辞典で言葉をさがすこと
47	先生のえい語が楽しくべんきょうできたこと。	えい語のはつおんと、えい語がちょっとおぼえられた	えい語をおぼえる時、「さいしょ」（えいごのはつおん）
48	ゲーム じしょであそんだこと	英語	よみかた
49	辞典を使ったこと	辞書の引き方	おもいつかない
50	英語辞書で遊んだこと	英語辞書を引けるようになった	ない
51	いろいろな、発音の練習をした事。	ちゃんとした発音ができるようになった事。	口の動きをまねして発音する事
52	じしょで数字をひいたこと	えい語のよみかたがわかるようになった	アクセントをどこにつけるのかがむずかしかった
53	男の子たちがへんなことを言い、みんなが笑ったこと。先生がちがえてしまったこと。	英語の字を発音出来るようになったこと。かける、じしょをひけるようになったことです!!	歌を全部覚えること。（ながれ星）新しい発音を覚える時でした!!
54	歌を歌ったこと。	英語のじしょをひくこと。	ほとんどない。
55	じしょをひくこと	英語全部覚えること。（発音することも）歌を歌うこと	歌が少しむずかしかった。
56	英語の読みがをおぼえた事と、みんなでゲームをした事と、じしょで言葉を調べた事	正しい英語の発音と、英語の読みがな	発音？
57	ゲーム、じしょ	英語のはつ音。	英語のはつおん、ふりがな
58	ゲーム	はつおんがえいごらしくなったこと	はつおんきごうがあんまりわからない
59	ボードにえがかけたこと	えいごがうまくできたことあとえがうまくなったこと	えいごのながいばあじょん!!
60	さいごゲームができたこと。	えいごがうまくなったこと	えいごの長い所
61	ゲームができたこと。	いろいろなえいごのはつ音ができたこと。	いろいろうた。
62	・今日のゲーム？ ・正しい発音がうまく言えた！ ・「かいじゅうたちのいるところ」の絵本の読みきかせ	・正しい発音 ・記号が分かるようになった ・歌（英語の）がうたえた ・英語のじてんがひけた	・新しい発音のしかた ・歌…

ことは、聞くだけでは難しい音素の識別を可能にする有効な方法のひとつである。またこの方法を使うことで、リテラシーへの円滑な移行も可能であるため、子どもたちが初見の単語をカタカナ発音やローマ字読みする危険性も回避できる。したがって、これからの小学校での英語教育においては、読みがなとしての発音記号の導入を積極的に進めていくことを検討すべきであろう。

もちろん、ヘボンみらい塾（初級編）の授業内容は全8回に過ぎず、小学校英語の年間35時数という時間数を考えれば、現状のカリキュラムをそのまま小学校で用いることはできない。また、人数もひとクラス12人程度と少人数であり、さらにもともと本人もしくは保護者が英語に関心があって受講していたと考えられるので、一般の小学校とは状況がかなり違うことは確かである。しかし、読みがなとしての発音記号を導入することでオーラシーからリテラシー教育への円滑な移行を可能とし、オーラシーとリテラシーのバランスのとれた統合的な英語教育を目指すことは、これからますます早期英語教育の充実が図られようとしている現在において、大きな可能性を秘めていると考えられる。先述したように、ヘボンみらい塾では初級編に続く上級編のカリキュラムを開発した。詳細についてはまたの機会を待つことになるが、上級編ではリテラシーへの接続をより意識した内容となっている。オーラシーとリテラシーのバランスのとれた統合的な英語教育を実践することは、小学校英語のさらなる発展につながるものである。

#### 謝 辞

本稿の執筆にあたっては、ヘボンみらい塾スタッフの多田ひとみ氏より多大なる協力を得た。心より謝意を表したい。

#### 参考文献

- アレン玉井光江. (2010). 小学校英語の教育法 ― 理論と実践. 大修館書店.
- 文部科学省. (1998). 中学校中学校学習指導要領 第9節 外国語.  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/010.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/010.htm)). 2010年1月1日取得.
- 文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領.  
([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf)). 2010年12月26日取得.
- 文部科学省. (2009a). 平成21年度英語教育改善のための調査研究について.  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/04/1260792.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/04/1260792.htm)). 2010年12月28日取得.
- 文部科学省. (2009b). 平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (A票)の結果について (速報).  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/news/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2009/06/11/1269841.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news/__icsFiles/afieldfile/2009/06/11/1269841.pdf)). 2010年12月26日取得.
- 文部科学省. (2009c). 【報道発表】平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (B票、C票)の結果について.  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyochukyo3/004/siryo/attach/1283068.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyochukyo3/004/siryo/attach/1283068.htm)). 2010年12月26日取得.
- 文部科学省. (2010a). 英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査 (児童用).  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2010/12/06/1299796\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2010/12/06/1299796_1.pdf)). 2010年12月26日取得.
- 文部科学省. (2010b). 「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」結果について.  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1299796.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1299796.htm)). 2010年12月26日取得.
- 文部科学省. (2010c). 平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (C票)の結果について.  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/news/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2010/03/01/1269841\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news/__icsFiles/afieldfile/2010/03/01/1269841_3.pdf)). 2010年12月26日取得.
- 茂木弘道. (2004). 文科省が英語を壊す. 中央公論新社.
- 中津燎子. (1978). なんて英語やるの. 文藝春秋.
- 大津由紀雄・鳥飼玖美子. (2002). 小学校でなぜ英



- 語？ — 学校英語教育を考える. 岩波書店.
- 大塚登. (2005). 構音発達と音声知覚. 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』6, 150-160.
- 齋藤孝・斎藤兆史. (2004). 日本語力と英語力. 中央公論新社.
- 斎藤兆史. (2003). 『『英語が使える日本人』幻想から醒めよ』. 『諸君!』35(12), 66-71.
- 高桑光徳. (2010). 小学校英語におけるオーラシー能力の育成について. 『明治学院大学教養教育センター紀要カルチュラル』4, 211-222.
- 樋田光代. (2008). 小学校英語ホップ・ステップ・中学! — 小中兼務で見た、これからの小学校英語と入門期の中学校英語. 文溪堂.
- 湯澤正通・関口道彦・李思嫻. (2007). 日本人幼児における英語の音韻認識 — 日本人幼児にふさわしい英語教育について考える —. 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』56, 153-160.
- 吉田研作 (編). (2008). 21 年度から取り組む小学校英語 — 全面実施までにこれだけは. 教育開発研究所.